広告

企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

美濃和紙で最高の「コーヒーを」手折りでおもてなし演出

澤木 健司　岐阜県／美濃手漉き和紙職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

プレゼンテーションする澤木さん

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

1月18日、プレゼンテーションにて

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。岐阜県選出の匠、美濃手漉き和紙職人の澤木健司さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日　熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

極薄の「ろ紙」伝統工芸の絆

澤木さんは、主に楮（こうぞ）や雁皮（がんぴ）といった天然の靭皮（じんぴ）繊維を原料とした素材としての和紙作りが中心で、紙工芸の会社や作家の手を経てランプシェードや水うちわとして製品化されている。澤木さんの仕事は、消費者が直接感じることが少ない、いわば“裏方”。そのため、澤木さんは「素材メーカーとしての仕事」以外の仕事をつくろうと、2014年に手漉（す）き和紙で作った折り紙を樹脂で固めたジュエリーを開発。今回のコーヒーフィルターは、その第二弾として澤木さんの構想にあがったという。

半世紀以上前、美濃和紙職人の手で漉かれた紙を使ったコーヒーフィルターは、海外で使われていた歴史を持つ。その復活を目指して生まれたのが、コーヒーフィルター「立花」だ。原料となる楮やトロロアオイは、工房のある美濃市立花地区産で、汲（く）み上げた地下水で手漉きした極薄の和紙を一つひとつ丁寧に手で折って仕上げていく。見た目にもこだわり、「立花」に合わせ、ドリッパーに乗せると花が開いたようなデザインにした。

汲み上げた地下水で紙を漉く澤木さん

粗挽き豆のうま味や油分を吸収することなくドリップすることができるため、雑味の少ない、深くてまろやかな味わいを生むという。もちろん、手漉き和紙で使われる保存殺菌用の化学薬品も使っていないため、使用後は豆と一緒に土に埋めても自然にかえっていく。

商品には、完成品とともに手折り用の和紙と折り図が入っており、一枚の紙から自分の手でフィルターを折り、淹（い）れることでお客様をもてなすこともできる。味わいと手間が、ブレイクタイムを豊かにする。

完成プロダクト　コーヒーフィルター「立花」

「立花」世界の代名詞に

澤木さんが工房を構える美濃市は、ユネスコ無形文化遺産「本美濃紙　日本の手漉き和紙技術」のふる里。約1300年前の大宝律令の際に戸籍用紙として使われたほど美濃和紙の歴史は古く、無形文化遺産登録の際は全国から注目を集めた。しかし、美濃和紙を取り巻く環境は、他の伝統工芸品の産地同様に厳しい。澤木さんによると、美濃和紙の世界でも伝統を支える職人は少なく、生業として成立している職人（工房）となると、更に少ないという。

その中で澤木さんが取り組むのは「手仕事のフェアトレード」。伝統を守り、職業としての手漉き和紙づくりをしていくこと―。天然の靭皮繊維を原料とする以外にも、手漉き和紙の現場では、今なお使われている保存殺菌剤も使わない。広大な森林伐採や膨大な化石燃料を使った薬品と製造過程としての動力、環境負荷の代償によって作られている現代の紙とは大きく一線を画している。澤木さんのプロダクトはすべて手仕事で生み出され、コーヒーフィルターには「淹れる人、たしなむ人、地球の環境。すべてに優しい紙」という思いを折り込んだ。

プロジェクトを振り返って澤木さんは「各過程に締め切りがあったので、『立花』を生み出せた」と自虐的に笑うが、岐阜県代表に選ばれたことが「立花」の漫然としたイメージをより強くさせ、しっかりと実を結ぶことができたという。工房を訪れたサポートメンバーの下川氏からは、「売る」ためにできるだけ多くの人へ伝わるようにとの助言を受け、パッケージスタイルや印象的な商品ロゴマークを入れることなどデザイン的要素を取り入れた。また、伝統工芸の中に革新と斬新を取り入れるなど、高い技術と意識を持った全国の匠と交流し、その感覚に触れることができたことは、より良いモノづくりを目指していくための自信につながったと話す。

手漉き和紙の技術により磨きをかけるため、澤木さんは地元の産地団体を離れ、楮などを栽培して地産地消の紙作りを実践するなど、独自の取り組みを続けている。その道は決して平たんではないが、プロジェクトで生まれた「立花」が国内外で使われ、手漉き和紙のコーヒーフィルターといえば「TACHIBANA」と呼ばれる日が来るのも、そう遠い話ではないかも知れない。

澤木 健司
岐阜県／美濃手漉き和紙職人

1980年生まれ。2000年から2003年まで美濃和紙伝統工芸士「市原達雄」氏に師事(大光工房)。2004年に美濃手漉き和紙工房Corsoyard（コルソヤード）を開業。和紙業界で多用されている保存殺菌剤を使用しない、人と環境に優しい紙づくりに取り組み、紙づくりだけではなく、障子張替などのサービスや女性向けジュエリーなどの商品開発にも力を入れている。
ホームページ　http://corsoyard.com

フィルターは一枚一枚丁寧に折り上げられる

ロゴマークを入れ、デザインにもこだわったパッケージ

アドバイスする下川氏（左）

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT